紙上講座 Ⅲ

伝えたい ふるさと東 4

亀井六郎伝説

藤井 実さん（東町花輪）

東には阿倍宗任（あべたむねとう）伝説とともに、亀井六郎伝説も伝わっている。

『東村郷土史』には次のようにある。

「此の時代（鎌倉時代）、義経が兄頼朝に追はれ、奥州に下向に際し、桐生川より本村に出づる途中、土兵に襲われた。

其臣亀井六郎傷き大字沢入（榆沢（ねりざわ））に留り土着したと傳へ其の後裔（こうえい）今尚存す」と。

※『同郷土誌』には、「（亀井家の）宗家に祖先が携え來りしと云う土製の大壺を傳へてゐる（岩澤正作氏曰く、その壺は石器時代のものなり）」と。

※大正十四年～昭和七年まで村長をつとめた亀井久五郎氏は、亀井六郎の一族という（『群馬県家系大辞典』角川書店）。

また、『勢多郡東村の民俗』には次のように記されている。

「（榆沢（ねりざわ）の）亀井卯三郎さんの家の裏山に亀井六郎の墓と伝えられる五輪塔がある。

※亀井卯三郎さんは故人

※榆沢は沢入の小字（こあざ）名

現在住む人なく集落は消滅してしまった。

※鎌倉時代と思われる墓の五輪塔の一部擬宝珠（ぎぼし）が数基残る。その内の一基が六郎の墓と伝えられる。

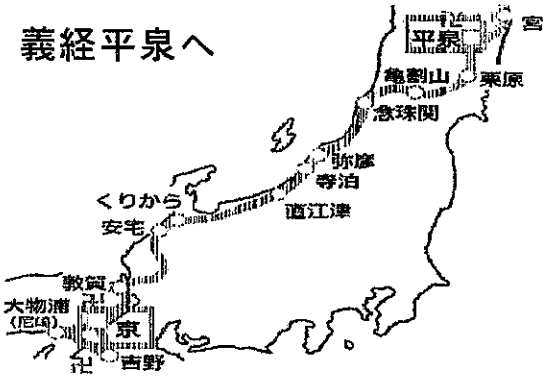
六郎は源義経の四天王の一人。亀井家はその子孫という。

※義経四天王は、亀井六郎、片岡八郎、伊勢三郎、駿河次郎（諸説）

兄頼朝に追われた義経は奥州へむかった。

※義経の都落ちは一一八五年。難波・大和から北陸道・越後道を抜け一一八七年奥州平泉（岩手県）藤原秀衡のとに身を寄せた（左図）

義経平泉へ



※義経の奥州への避行ルート日本海側の北陸路を北上のほか諸説ある。

※義経にかかわる「伝説・伝承」も日本全国津々浦々に存在する。

そのとき六郎はいつ果てるかも知れぬ自分の身の上を案じて、ねば土（粘土）で自分の姿をつくって、沢入で果てたことにしてここへ埋めたという。

その縁故で沢入に亀井の系統がある」とある。

※「沢入」は「楡沢（ねりざわ）」の意

六郎は亀井六郎重清とい、実在した人物。

『吾妻鏡』「元暦二年（一一八五）五月小七日の条」にその名を残す。

元暦二年（一一八五）五月小七日己丑（つちのとうし）。

源廷尉（げんのていい）（義経）が使者〔亀井六郎と号す〕京都自り参着（さんちゃく）す。

異心を不存之由（ぞんぜざるのよし）、起請文（きしょうもん）を献（けん）ぜ被（らる）る所也（ところなり）。

因幡前司（いなばのぜんし）廣元（ひろもと）、申次を爲す　（以下略）

義経が頼朝にあてた弁明書を使者亀井六郎が持って到着したという内容。

亀井六郎重清は、紀伊の豪族鈴木氏の一族の出で、祖父の代から源氏との繋がりがあったという。

一一八〇年八月平家討伐をかかげて頼朝挙兵。その年の十月義経は郎党を率いて頼朝と対面した。

はたしてこの郎党のなかに六郎はいたのであろうか。

六郎は義経に従い源平の戦いに戦功があったが、兄鈴木三郎重家と共に一一八九年奥州平泉の衣川の戦いで義経とともに露となった。

『義経記』に六郎の壮絶な最期が記されている。

兄重家は二騎三騎と斬伏せ、七八騎に手負せるも、深手を負ひ、「亀井六郎、犬死するな。重家はもはやこれまで」と腹を切り果てた。

六郎は鎧の草摺（くさずり）をかなぐり捨て、「よく聞け、よく見よ。鈴木三郎が弟亀井六郎、生年二十三。弓矢の手並を診よ」

言うやいなや、大勢の中へ切り込み、弓を射、太刀を斬りけるに、立ち向かう者ぞなき。

敵三騎討取り、六騎に手を負せるも、我が身も大きな傷を数多く負ひければ、鎧の上帯をほどき、腹掻切（かつき）って、兄の伏したる所に、同じ枕に伏しにけり。

文治五年（一一八九）閏四月、義経二十二歳、六郎二十三歳の春だった。

夏草や兵（つわもの）どもが夢のあと

芭蕉